

浪江の こころ通信

• 第6号 •



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第6号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





荒川 勝己さん(請戸)

取材者：(特活)岩崎NPO 高橋
取材日：11月9日

帰りたくても、帰れない

地震があって、津波が来て、逃げて。その翌日の13日、荒川さんは妻と一人娘と3人で、妻の実家である秋田県湯沢市岩崎地区へ“緊急避難”し、現在、妻と2人で近くのスーパーストアで“接客サービス”をこなしている。

最初のうちは、妻と娘をこちらに預けて、自分は災害復興で戻ろうかという気持ちだった。しかし、原発の放射能で入ることができなかった。そんなこんなうちに、こちらで仕事が見つかったので…。今のところ仕事があって、収入もあるし、お父さんの所で一緒に住む場所もある。現在困っていることは特別にない。一番の時に戻れば、人命救助なり災害復興なりで入りたかったけど…。

もともと米とお花の専業農家だった。それだけでは食えないので、コンビニや電気屋でバイトしていた。だから、接客ということに関してはそん



▲職場の休憩時間での荒川さん

なに困ることはない。農業はひとりでの作業だが、接客の仕事はみんなとできるので、むしろ楽しいくらい。

田んぼは9割方小作だが、去年の作付けが6町5反。花は300坪ぐらい。津波で家、田んぼ、花畑、何もかも全部やられて、何も残っていない。

線量の少ないところから帰してくれるという話が今出ているようだ。原発の場所は家から4キロあるが、私の所は線量が非常に少なく、ここら辺と大した変わらない。が、帰れと言われても帰れないです。町の基盤も、家も、仕事もないから。

浪江の仲間、みんなが元気でまた会えればいいなあといつも思っています。



吉田 忠春さん・輝子さん(室原)

取材者：きょうとNPOセンター 田口
取材日：10月19日

「あの時(3月11日)を想う!! 笑顔と希望を忘れずに」

<吉田輝子さんの手記より>

吉田さんは、ご家族とご親戚総勢23人で、2日をかけて義姉の旦那さまの弟さんを頼りに、京都に避難して来られました。寝たきりの84才の母(以下「おばあちゃん」と5カ月のお孫さんも一緒でした。現在、京都のアパートで、息子さんご家族と一緒に生活されています。



▲吉田忠春さんと輝子さん

3月15日、家族・兄弟みんなが集まる中、決断をしました。「親戚のいる京都へ、一緒に行こう」。

吹雪の中、新潟まわりで北陸道を通り、5台の車で移動。ひどい渋滞でした。ガソリンはすぐ無くなり、少しずつみんなに分け合って補給しました。おばあちゃんは、酸素ボンベの充電が切れると、命がつかない…。電気補給にも必死でした。

京都に来てからは、親戚のみならず、自治会長さんをはじめ、周りの方にとってもよくしてもらっています。

おばあちゃんの介護(病院での付き添い)を中心に、毎日を送っています。おばあちゃんと孫たちの存在が私たち家族をつなげてくれていると感謝しています。

私は百姓だから体を動かして仕事をしたいです。草刈りでもなんでもしたいと思っていますが、今は事情があって仕事ができず、家族のために網戸をつくったりもしています。

室原の自然クラブのメンバーと一緒に、休耕地が荒れないようにとひまわりやコスモスを植えていたことも懐かしい。お酒を酌み交わした仲間たちのことをよく思い出します。遠く離れていても連絡を取り合える仲間がいることは心強い。一方で、家族以外の人とゆっくり話ができない今、寂しい気持ちにもなります。やっぱり浪江へ帰りたい。帰ることは難しいこともわかってはいます。でも、いずれ福島県内には戻ることができたらと思っています。



▲休耕地に咲くコスモス



原田 富子さん(高瀬)

あの日 あの時 そして今

福島県内からの投稿

現在原田さんは、福島市内の借上げ住宅で避難生活を送っています。

平成23年3月11日、12日、この世の出来事とは思えない惨事があった。3月12日早朝、菅首相の命令で即刻避難するように…着の身着のまま、急いで家族5人車に乗った。指定された避難場所津島の体育館へと向かい、10分ほど走ると道路という道路は車、車、車…。いつ目的地に着けるやら。普段なら30分で行ける場所へ5時間余りかかってようやく着いた体育館の中は、人であふれていた。やっとのことで片隅に座ることができホットするとそれもつかの間、同日午後3時半、原発で水素爆発があり、一斉に車に飛び乗り体育館を後にした。

私たちは幸いにも福島市の庭坂に二男が住んでいたのそこへ避難した。その夜は、親戚等が次々避難してきて、20人ほどで一夜を過ごした。13日

の朝になって親戚の人たちもそれぞれの知人を頼って、庭坂を後にした。私たちは、二男の家で1カ月ほど世話になり、その後指定された宿へ行き、4回ほど引っ越して、今は借上げ住宅で暮らしている。

知らない土地、知らない人たち…。でも、みんな、みんな親切に声をかけてくださって、本当にありがたい。

それでも、80年浜通りに生きてきた私たちには、気候をはじめ、あれもこれも数え上げればきりがなく不自由なことばかり。

でも、仕方がない。あれこれ気に病んでも解決できない問題なのだから。

せめて、これから残された人生、ほんのひとときでもいいから、安らぎの時間がもてたらと、毎晩祈っています。

あきらめてはいけません。命ある限り、生きていきます。お世話になった恩返しをしながら、優しくされたら、優しく返すもの。私たちは、たくさんのありがたみをいただきました。家族が離れず一緒にいられたことが本当にありがたい。出会えた方々、友だちに「ありがとう!」を伝えたい。

みんな、身体に気をつけて。元気な姿で会いましょう!



今野 昇さん(津島)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・山本・小根山
取材日：11月19日

遠くにいても浪江の復興を心から支えていきたい

津島でガソリンスタンドを営んでいた今野さん。地震後は、浪江の避難所でボランティアとして1カ月ほど頑張っていたが、4月上旬に現在の東京都町田市に妻、長男（小学5年生）と3人で移り住み、新たな生活を送っている。

震災直後は、すぐに事業を再開できると考えていました。しかし、原発事故が甚大だと知り、町民の皆さんと一緒に二本松市の東和に避難しました。何かの役に立てればと3週間余り、避難所のボランティアに協力させて頂いていただきました。しかし、生活の糧と息子の今後を考え、町田市に移りました。幸いにして友人が仕事を紹介してくれましたが、現在は来年春までの契約社員です。これまでとはまったく異なる業種ですが、幸いにして今までの趣味が役立つ何かか頑張っています。こちらでは被災者ではあっても、それに甘えることなく、自分たちの力で乗り越えなくてはいけないことを



実感しています。日々の生活の中で被災者優遇など、何もありません。浪江を離れて暮らしていると、同じ福島県からの避難者であるのに、市町村によって対応が異なることが気になります。甲狀腺の検査などでも連絡をいただきませんが、正直、そのために福島まで戻るとは負担にもなります。新しい土地になかなか馴染めず、仕事が見つからないだけでなく、話し相手もいない方がいるようです。例えば、県外それぞれの避難先で、福島県からの避難者のまとまった窓口をつくり、生活の課題を把握したり、福島県避難者のための働く場の確保を行うなどの工夫

いたアパートがある名取市に移動。働きたいという気持ちと腕をなまらせないという思いで、名取市文化会館でマッサージのボランティア活動を4月末まで続けました。その後は、接骨院の恩師に仙台市若林区の現在の物件を紹介され、迷う間もなく開業を決断しました。引っ越しは5月1日。私たちがらしい素敵な雰囲気になるように部屋の模様替えをしたり、忙しかったですね。そして何とか6日には開業することができました。その後は、近隣のお店や住宅約300件を訪問し引っ越しのあいさつ。顔を覚えていただくために、ちょっとした声かけを心がける毎日でした。少しづつ応援してくれる仙台の方が増えたり、テレビで取り上げられていただいたお陰で今は忙しくさせていただいています。接骨院が休みの日は、夫婦で自転車に乗り仙台市内各地に出かけます。「まち歩き」ですね。仙台は知らない場所ばかり。患者さんがいらつしやるエリアが分からないと、接骨院までの道案内もできません。だからこそ、

があつてもいいと思います。避難生活の長期化の中で、ぜひ考えていただきたいです。一時帰宅で荒れ果てた津島の風景を見るたび、以前の津島を取り戻すことは並みの努力ではできないと痛感しています。むしろ、あきらめる方が多いのではないかと絶望感に駆られます。でも、テレビで商工会青年部が頑張っている様子を見るたびに勇気もらいます。同時に、皆さんがこんなにも頑張っているのに、自分たちが何も協力できないことにもどかしさを感じます。祖父の代から地域の皆さんに支えられ給油所を経営してきたのにもかかわらず、何も皆さんにないさつもできずに浪江を去ったことに、むしろ仲間たちを裏切ったような罪悪感と悲しさを覚えることもあります。でも、決してそうではない。私も浪江に帰って、昔の連中と頑張りたい。そんな苦しい思いを妻とよく話しています。いつか浪江の皆さんと会える日が来ることを信じて、遠くからではあります。浪江町の復興を支えていきたいと思っています。



大内 善一さん・ひとみさん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：11月19日

浪江町のコミュニティを仙台で

5月6日に仙台駅近くで「仙台中央接骨院・大内鍼灸院」を開業された大内夫妻。

現在は、地域になじめるように、そしてお客さまが気持ちよく訪れていただけるように、一人ひとりとのコミュニケーションを大切にしながら暮らしている。



▲接骨院の正面入り口にて。ブログも見てね！
<http://blogs.yahoo.co.jp/ouzen3914>

震災時は、ちょうど午後の診察中でした。患者さんにご自宅へお帰りいただきたいたと思つたら、骨折された方が来院。素早く患部を固定し松葉杖をお渡しして「津波が来るだろうから逃げよう。」とその場を後にしました。その日の夜は、高台に住む親戚の農家のビニールハウスで過ごしました。その後は、津島中学校、さらには福島市の姉の家に避難。その後、息子が4月から学校に通うため契約して

いたアパートがある名取市に移動。働きたいという気持ちと腕をなまらせないという思いで、名取市文化会館でマッサージのボランティア活動を4月末まで続けました。その後は、接骨院の恩師に仙台市若林区の現在の物件を紹介され、迷う間もなく開業を決断しました。引っ越しは5月1日。私たちがらしい素敵な雰囲気になるように部屋の模様替えをしたり、忙しかったですね。そして何とか6日には開業することができました。その後は、近隣のお店や住宅約300件を訪問し引っ越しのあいさつ。顔を覚えていただくために、ちょっとした声かけを心がける毎日でした。少しづつ応援してくれる仙台の方が増えたり、テレビで取り上げられていただいたお陰で今は忙しくさせていただいています。接骨院が休みの日は、夫婦で自転車に乗り仙台市内各地に出かけます。「まち歩き」ですね。仙台は知らない場所ばかり。患者さんがいらつしやるエリアが分からないと、接骨院までの道案内もできません。だからこそ、

勧めていただいた場所はなるべく訪れるようにしています。そうすると、その後話が深まり楽しいです。これから取り組みたいと思っているのは「浪江町仙台支部」を作ること。浪江町出身者やゆかりのある人が仙台近郊にいらつしやるのが分かりました。今後は、この皆さんと食事会や交流会を開催して交流を深めたいですね。そして、通信やかかわる版のようなものを作成して皆さんに配布したり。できたら全国各地に「浪江町〇〇支部」ができるといいなと考えているところ。これからは今ある環境や人々とうまくやれるように努力し、患者さんに元気になつてもらえるように自分も前向きで元気にありたいと思っています。



長岡 新一さん・仁子さん(苧宿)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：11月10日

今、一番の思いは 「浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。」

浪江町苧宿で農業を営んでいました。今は、福島市大森の借上げ住宅の息子家族が住む上階に住んでいます。



▲金婚式を迎えた、笑顔がすてきな長岡さんご夫妻

と、言うに言われぬ感慨があります。田に苗を植え稲を刈り米を作り、畑を耕し種を蒔いて野菜を育て、土から恵みを得て、今思うと自然の厳しさと豊かさに育まれて、夫婦つつがなくよく生きてきたものだと思います。生まれ育った土地だから、代々受け継いできた土地だからと作物を作ってきました。今の一番の思いは「浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。」です。自身を奮い立たせるように、強く思っています。

震災時、私は自分の田んぼでトラクターを運転中でした。妻は棚塩公民館で、「武扇会」結成30周年記念発表会に向け、踊りを教えていました。妻は津波の情報も知ることなく、練習を切り上げ何とか帰宅、その後棚塩公民館が津波で変わり果てた姿となったのを見たときは、背筋が凍る思いでした。県内外の避難所や親戚宅を転々として、土湯温泉の旅館を後に、ここ福島市大森の借上げ住宅に落ち着きました。仮設住宅に比べると情報が入りにくく、孤立感を感じることもありますが、この借上げ住宅の上下階で、前後して息子家族も住むようになり、心強く思っています。



▲踊り「武扇会」師匠である仁子さん。「相馬流れ山」を福島市芸能祭で各避難先から駆け付けられたお弟子さんたちと披露



山田 拓司さん・乃里恵さん(加倉)

取材者：ピースバンクいしかわ 谷内
取材日：10月23日

もう一度みんなで集まってバレーでもやりたい

系列工場への転勤の形で避難をしてきて、石川県金沢市の市営住宅で暮らし始めて8カ月が経つ、山田さんご夫妻と3人のお子さんたちのご様子を伺いました。

■拓司さん
福島で勤めていた系列の工場がこちらにもあり、震災から1週間位で会社から社員全員転勤の辞令が出たと連絡がありました。転勤と言っても状況が状況なので家族と話し合って決めてくださいとのことでした。私は双葉町の工業団地に勤めていて工場の復旧は困難と思い、妻とも相談しこちらに来ることにしました。

会社に行けば福島から来た同僚がいるので少しだけ福島の雰囲気があります。子どもたちもすっかりこちらの生活に慣れ友だちもできました。妻が勤めていた会社は原発事故により規模を縮小したため解雇されましたので、今は金沢での仕事を探しています。

今会いたいのは、芸能保存会の仲間です。神社の祭りの際、神楽を奉納したり盆踊りのときに太鼓を叩いたり、すごく懐かしいですね。その中でもすごくお世話になった人に今、会いたいんです。その方に「このままでいい。収入もないし、こういうわけで石川県に行くと思う。」

とメールしたんです。それなら「寂しくなるけどきつとまた会えるよ。」ってその一文だけの返信メールが返ってきて……。なんかそのときはすごく抑えきれないものがありました。本当なら今ごろの時期は、お正月に奉納する神楽の練習をしているところなんですけど。みんなに会える日を楽しみにしています。

それから、地元のバレークラブの仲間にも会いたいです。試合の勝ち負けは別として、とても楽しいチームでした。その中でも、ひとつ下の後輩がいて、いろいろと自分のサポートをしてくれてすごく助けられました。震災があつてから、連絡はとれなくなりましたが、まだ一度も会えていないんです。仕事が忙しいらしく、この前、帰ったときも時間が合わずに会えませんでした。もう一度みんなで集まってバレーでもやりたいですね。



▲(右から) 山田拓司さん、湊世くん(4歳)、乃里恵さん、玄琉くん(1歳)、真生くん(3歳)



石井あかねさん(小5)(棚塩)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 松田
取材日：11月14日

「おうちでのんびりしたいなあ」

仮設住宅の向かいにある佐原小学校は定員一杯になっているので、毎日スクールバスで少し離れた荒井小学校まで通っている小学5年生。

初めは浪江町の津島に避難し、二本松市や福島市土湯温泉町を経て7月末に福島市佐原の仮設住宅に引っ越ししてきました。

お父さんとお母さん、弟の京輔くん(小3)と妹のあゆみちゃん(小1)の5人暮らしで、おばあちゃんたちも同じ仮設住宅の別棟に避難しているので、いつでも会いに行けるそうです。

■みんな元気にしてるかな？
学校は弟と妹も一緒に、毎日12人でバスに乗ります。しのぶ台からも同じくらい人数が乗って、みんなで通っています。バスの中では、トランプなどのゲームをしたり、本を読んだりしているから、けっこう楽しいですよ。友だちもたくさんできて学校も楽しいけど、女子のチームがないので浪江でやっていたソフトボールができないのがちょっと残念かなあ。
走るのは、どつちかという短距離よりも長距離の方が好きで、練習のときには6年生と一緒に走って4位だったので、学校の記録会でどんな記録が出るか楽しみです。
最近、算数が好きになってきました。それから国語とかも好きです。将来は、お医者さんのような人を助ける仕事にできれば良いなあと思っています。
3月の地震のときは、ちょうど5校時目が終わるところで、4月から幾世橋小学校の1年生になる妹にあげるプレゼントを作っていました。
最初は、「小さな地震かな？」と思っただけで、けっこう大きな地震だったので驚きました。自

分は泣かなかったけどボウゼンとしていました。
みんなで校庭に避難して家からの迎えを待っているときに、寒くてジャンパーを取りに教室に戻って、また校庭で待っていました。
浪江の友だちにも会いたいです。近くには避難している人もあまり連絡できないし、遠く県外に行っちゃった人もいるから、なかなか会えないですよ。
友だちと「サンブラザー」で、鉛筆のかわいいものやいろんなアクセサリーを買うのが楽しかったですけど、こんなじゃちょっと難しいなあ…。
■寒いのは苦手だけど、仮設で元気にしているよ
9月からは放射線の線量計が渡されたので毎日つけています。体育のとき以外はちゃんとつけていますよ。でも休みの日に遊びに出かけるときは、ときどき忘れることもありますけどね。
これから冬になると、寒くなるのが苦手。
スキーとかは全然やったことがありません。浪江ではあまり雪が降らないので、どうしようかなあと考えているところ。
学校に行くときは、寒くない



▲仮設住宅の部屋で
(仲良し3姉弟(右:あかねさん、中:あゆみちゃん、左:京輔くん))



原中 正義さん(田尻)

取材者：元気玉プロジェクト実行委員会 江川
取材日：11月19日

出口はまだ見えないが、助け合ってやっていく以外、方法はない

田尻地区区長である原中さんは、地域でともに暮らしてきた皆さんに「伝えたいこと」を抱えていました。田尻地区としての今後の行政について。田尻の地で再び力を結集できることを願って、今できることから活動に取り組みられています。



震災直後は伊達市の親戚宅にお世話になっていましたが、3号機の爆発後、喜多方市へ避難し、現在は家族で市内の借上げ住宅に入居しています。避難直後のストレスから体調を崩した母も、ようやく生活のペースをつかみかけてきたようです。とはいえ、地元の方から「会津の冬は経験してみたいと、わがんながらなし」といった言葉を耳にするなど、いまだ先行きの不安は消えません。それとともに、温暖で穏やかな浪江での生活がつくづく懐かしく思い出されま

と総会を控えていましたが、直前の11日に思ってもみなかった大震災に見舞われ、以来、業務はストップしてしまいました。役員の皆さんに集まっていたことができたのは、生活がようやく落ち着いてきた8月末。27日に二本松市の男女共生センターで平成22年度の期末監査を行い、次いで第1回役員会も開きました。その協議の結果、当面の方向性が決定したので報告させていただきます。
第一、田尻行政区の「役員」は、平成22年度末をもって改選時期だったが、行政区住民を招集して総会を開催することは現状困難であるため、全役員が引き続きその職にとどまり、行政区財産の管理および必要な事項を処理することとする。
第二、「大字費」については徴収しない。
第三、「役員その他の報酬」については支給しない。
第四、浪江町で計画する復興計画等に要請があった場合は全面的に協力する。
第五、事故収束後の早期帰宅を目指し、田尻地区民の現状把

握に努める。以上です。
一時帰宅で目にした故郷の荒れた姿は、何とも情けなく、もどかしさを感じました。自宅復帰を果たすには原発事故の早期収束が前提になりますが、避難解除になれば、この先、地域としてやるべきことは山のように出てくるはず。
一方で、今現在、借上げ住宅や仮設住宅に入居していても、生活上の問題はひっきりなしに発生し、どこまでいっても出口はなかなか見えてきません。当面、助け合ってやっていく以外方法はないのだと思います。
これまで田尻地区の皆さんと連絡を取る方法がなく、困っていました。今回、このように「広報なみえ」「浪江のこころ通信」を通じて、田尻行政区の情報もお伝えできたこと、感謝しています。皆さん、今どのように過ごされているのでしょうか。この難局を乗り越え、田尻の地で、また皆さんと元気に会いたいです。その日がくることを切望しています。



福島県

小山 恒雄さん(高瀬)

取材者：ピーンズふくしま 味川
取材日：11月11日

再び会える日を心待ちにして

二本松市の借上げ住宅で避難生活を送っている小山さん。「故郷を離れて8カ月。浪江にまた帰りたいという気持ちは強くなります。」

今は、二本松の借り上げ住宅に住んでいます。8畳2間。前の生活と違って不便・不自由もありますが、それも言っていない。昔は学校とか町の活動がありました。今は何もなく、人との交流もありません。役場に行けば人に会うことができますが、普段の暮らしの中で交流がないのが寂しいです。退職後、ゴルフが唯一の趣味でした。地震にあったのもその帰り道。あと10分、その道を通るのがずれていたら、津波にあっただろうかと思われませんでした。浪江町は、自然がいっぱい美しいです。緑が多く海あり山ありで、町をはさんで二つの川が流れ、鮭が遡上してきます。大堀相馬焼とか昔ながらの伝統工芸も盛んで、落ち着いた雰囲気の誇れる町です。先日、「ふるさとに戻りたい73%」「戻らない27%」という双葉郡住民の調査結果が報道されました。原子力発電所の廃炉まで30年と言いますが、私たちは10年がいいところですよ(笑)。放射能は怖いけど、浪江町に帰

りたいという気持ちの方が強いんです。浪江町にもどることができたら、まず今までおつきあいのあった皆さんの方々一人一人に会いたい。そして、ゴルフもしたいです。元々親睦のあった方とは現在も月に一度会って親睦を深めています。数人の親戚とは電話のみで、震災後まだ一度も会っていません。早く浪江に戻れる日が来てほしいです。今一番期待しているのは、科学の力。除染の方向にもっと進歩してほしいと思っています。散布すると放射能が消えてしまう。というふうなものをつくってほしいです。そういうことは、いくらお金を使ってもいい。これから30年は長すぎます。ラジウムの発見から110年。放射能を消去するような新しい物質の発見を期待します。今後の要望は：風評被害をなんとかしてほしいと思います。気持ちは分かりますが、そういったもののほとんどは、無知からくるものだと思います。地域で開催される懇談会でも参加者の怒りの声がよく聞かれます。



▲(左から) 恒雄さんと奥さまのセツ子さん

でも、役場の人も頑張っています。私は今できることから、そして皆で力を合わせ前向きにやってほしいと思っています。



神奈川県

金澤 麗奈さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・山本・小根山
取材日：11月19日

津波で亡くなった祖父、友人の思いを胸に頑張っていきたい

麗奈さんは、震災後、親戚何人かで福島県内から埼玉、神奈川へと転々と移動し、5月初めに現在の川崎市宮前区にお母さんとおばあちゃんと3人で暮らしている。現在は、家族と支え合いながら、転校した中学校で元気に頑張っている。

私は、友だちの家で遊んでいるときに、あの地震にあいました。中学校のグラウンドに逃げたあと、役場に無事避難することができました。友人の大浦清華ちゃんが、この地震で亡くなったことが本当に悲しいです。あの日、もし一緒に遊んでいたら無事でいられたのではないかと悔やまれて仕方ありません。私のおじいちゃんは、地震のとき、親戚の初七日で双葉町郡山に出かけていました。慌てておばあちゃんと一緒に請戸の自宅に戻



▲(左から) 麗奈さんと祖母のナカさん

ると地域の皆さんは避難していたようで、すぐに津波が来ました。おじいちゃんは、私が部屋にいたと思って2階にあがったようです。玄関口にいたおばあちゃんは押し寄せてくる津波を見て、通りがかりの車に助けられました。おじいちゃんを残したままで逃げたことを悔やんでいるおばあちゃんを見てみると、どんなにかつらい気持ちかとかわいそうでなりません。話し相手もなくマンションの中に一人でいるおばあちゃん、浪江の皆さんと請戸のなまり言葉で話したいといつも言っています。家では私に元気に話しかけてくれるおばあちゃんですが、一人で寂しそうにしていることが気がかりで、以前のように請戸の人たちが周りにいたら、もっと元気でいられるのと思います。お母さんは、避難生活の中で体調を崩し入院したり、今もときどきため息をつきながら私に話しかけることが多いです。毎日の生活や仕事の中でストレスを抱えているのではないかと心配です。

私は今の中学校で、仲のよい

友だちもできて楽しく通っています。8月には、私も所属している浪江のよさこい踊りのチーム「Wonderなみえ」が、高知のサマースクールに招待され、1週間本場のよさこいに参加しながらみんなと過ごしました。やっぱり浪江の友だちに会うことは何よりもうれしいです。私は、なみえ焼そばを応援するユニット「NYTS」にも所属していて、イベントなどでみんなと活動していたことが懐かしいです。亡くなったおじいちゃん、短歌や川柳、民謡を歌うことが好きで、郷土を思い請戸の民謡を作ったCDにしたり、仲間と「民謡バンド」を組んで活動していました。私もおじいちゃんに似たのか、音楽や人前で歌うことが大好きです。

将来はアニメの声優をめざして頑張りたいです。いつか必ず浪江町に戻りたい。仲の良かった友だちと一緒に遊んで、前のように暮らせる日がくることを待っています。